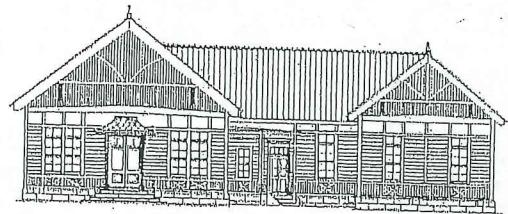
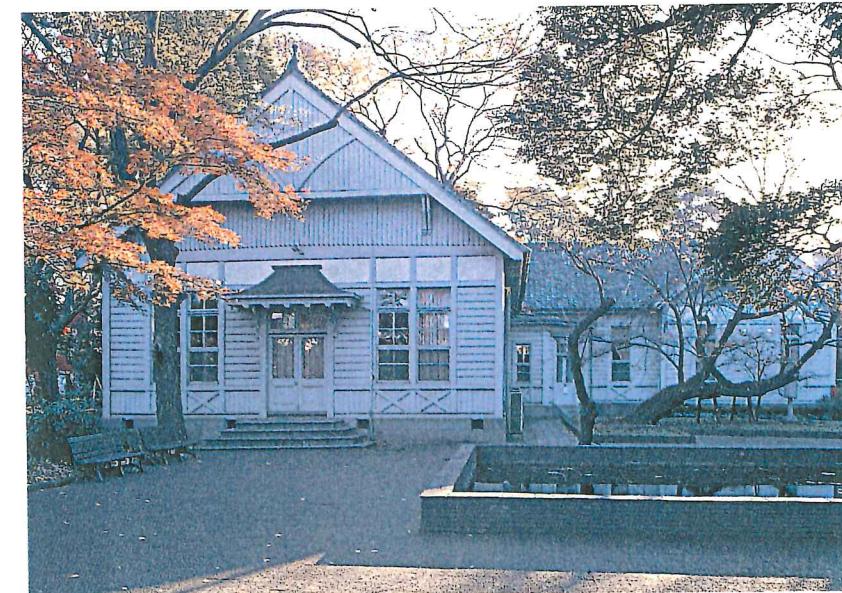


平成 16 年度
学習院大学史料館 常設展示

「収蔵史料展」



列品解説・列品一覧



平成 16 年度
学習院大学史料館常設展示

「収蔵史料展」

編集発行：学習院大学史料館

〒171-8588

東京都豊島区目白 1-5-1

TEL03-3986-0221 内線 6569

学習院大学史料館

ごあいさつ

学習院大学史料館は、学校法人学習院の百周年記念事業の一環として、昭和50(1975)年2月に開館いたしました。

その後、博物館相当施設に指定され、展示会・公開講座を開催して、学習院大学の学生はもとより、社会教育などへの貢献につとめております。

今回の常設展示会では、当館が収蔵している史料の一部をご紹介します。

多彩な史料をとおして、歴史と伝統を感じていただければ幸いです。

学習院大学史料館

ひたちくにしもだてはんいしかわけ からうまきけ しりょう 常陸国下館藩石川家家老牧家史料

牧家は大名石川家の家老。石川家は譜代大名で、伊勢国神戸(現三重県鈴鹿市)、のち常陸国下館(現茨城県下館市)に移り、石高2万石を領した。寛永15(1638)年、牧家は石川家に出仕し、のち千石取りの家老となり、幕末に至る。明治以降は教育者として下館の発展に貢献した。牧一氏は東京商科大学(現一橋大学)の教授(勅任文官)として24年間在職。

ひやつきやこうえまき 百鬼夜行絵巻

江戸時代写

全1巻

「百鬼夜行絵巻」は室町時代の成立。楽器や仏具・食器などが、妖怪となって、夜中にあばれ騒ぐ様子を描く。詞書はないため、ストーリーの展開はよくわからない。列品は、紙本着色。大きさは縦26.2cm。長さ9.34m余。重要文化財指定の京都大徳寺真珠庵の系統に属する。

常陸国下館藩家老牧家史料



がす ひやつきやこう 画図百鬼夜行

全3冊

江戸時代、「百鬼夜行絵巻」から派生した多くの作品がつくられた。列品の鳥山石燕画「画図百鬼夜行」はその一例。「画図百鬼夜行」は安永5(1776)年に江戸の本屋出雲寺和泉掾・遠州屋弥七から出版された。妖怪への「名付け」に特徴がみられる。石燕は正徳2(1712)年生まれ、天明8(1788)年没。狩野派の画人。

影印版(国書刊行会、1992年発行)

絵巻のいろいろ

絵巻は、平安時代から鎌倉時代にかけて盛んにつくられ、「源氏物語絵巻」や「伴大納言絵巻」などの傑作がうみだされました。

江戸時代以降は、「模本」が絵師などによって転写されて、多くの人びとに鑑賞されるようになりました。絵巻の題材は、物語や説話、寺院や神社の縁起、伝記、風俗など多彩です。有職故実や昔の人びとの生活などを知る史料として、江戸時代の国学や考証学などにおいても、絵巻は重要であったのです。

現在では、出版された写真図版で絵巻を鑑賞することができますが、筆づかいや彩色など、「史料」から観察できる点も少なくありません。

たしなむ 武士の学問と嗜み

江戸時代の武士は、文と武の両道を修学することが望ましいとされていました。文と武は、自己を治め人を治めき諭して行儀をただすためのものであり、欠くことはできない素養とされていたのです。

「文」は儒学、漢詩などのこと、「武」は軍学や兵学、馬術、砲術、剣術、射術、槍術、柔術などのことです。

また武士は嗜みとして、幕府の儀礼のなかで必要とされる作法や、和歌や書道、能や茶道などを身につけました。そのため武家史料には、武具や馬具とともに、茶器や書画、書籍などが多く含まれています。

むつくにたなくらはんしゆ かぞくあべけ
陸奥国棚倉藩主・華族阿部家史料

阿部家は、江戸時代、譜代大名で武蔵国忍、のち陸奥国白河、次いで同国棚倉で10万石を領した。家格は
雁間詰・城主。老中など幕府重職者を輩出した。維新後は子爵となった。

とくがわいえつなはつきゅう りょうちはんもつ
徳川家綱発給 領知判物

寛文4(1664)年4月5日

4代將軍徳川家綱が発給した領知判物。宛名の「忍侍従」は阿部忠秋。宛名の敬称は、列品では
平仮名「とのへ」であるが、官位があがると漢字「殿」と表記される。

陸奥国棚倉藩主・華族阿部家史料 No.1-1<レプリカ>

りょうちはんもついればこ
領知判物入箱

江戸後期

くろうるしぬり ふた まきえ
黒漆塗で、蓋に金の蒔絵で「御判物」とある。内部を梨子地とする豪華なもの。金具には、阿
部家の家紋である丸に達鷹羽紋が刻まれている。列品は、国元の文庫または宝蔵で大事に保管さ
れたと考えられる。

陸奥国棚倉藩主・華族阿部家史料 No.1824-1825

ぶけしょはつと
武家諸法度

嘉永7(1854)年9月25日

13代將軍徳川家定の將軍就任時に頒布されたもの。武家諸法度は、大名・旗本への統制のために
制定された基本法で、16ヶ条からなる。その第一条に「文武忠孝を励し、礼義を正すべき事」
である。

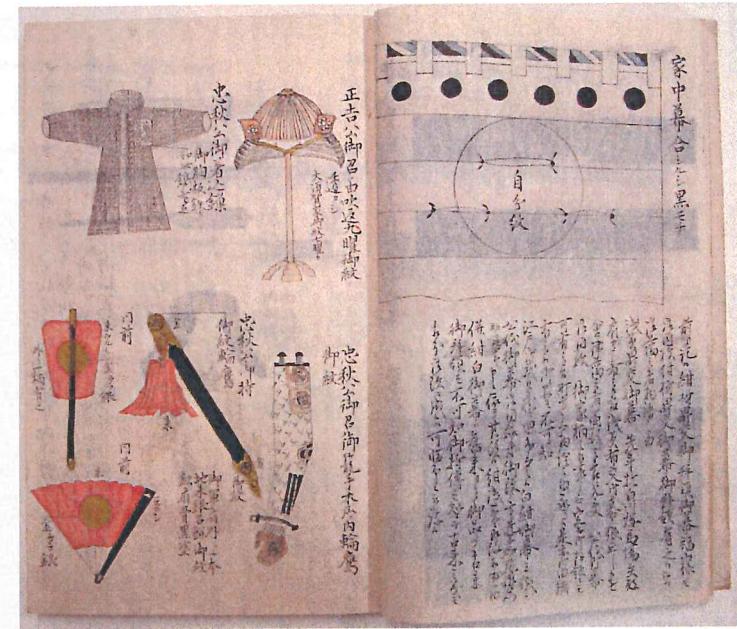
陸奥国棚倉藩主・華族阿部家史料 No.894

こうよふろく
公餘附録

明治初期

「公餘附録」(全12冊)は、棚倉藩の旧藩士川澄次是による編纂物。藩役所や藩士の家で作成された
職務日記および記録類、巷間の諸書を参照して編まれている。「公餘録」(全8冊)の続編。「公餘附
録」には、阿部家の歴史とともに、徳川將軍家・幕府に関する記事がみられる。

陸奥国棚倉藩主・華族阿部家史料 No.904



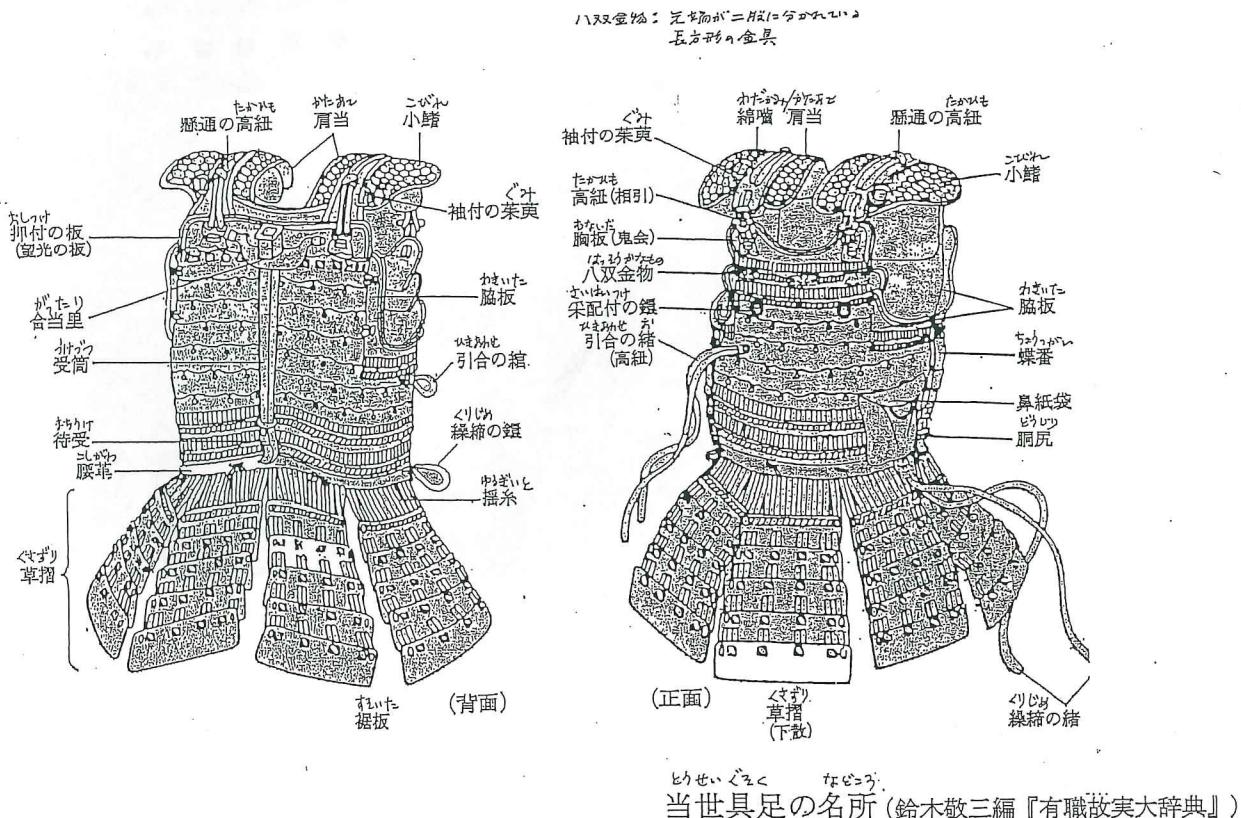
公餘附録 卷4(上)・卷6(左)

薄紫糸威二枚胴具足

江戸時代

兜は薄紫糸・萌黄糸頭形兜。鏡は鉄切付札七段下り。前立は銅鍛金日輪。胴
は鉄基石頭切付札、鞆黒漆塗。鞆は元来、なめし革のこと。頬当、三枚筒籠手、七本簾
を備える。列品は、戦国武将堀尾家、のち徳川譜代の大名石川家に仕えて家老職にあった
牧家に伝來したもの。

常陸国下館藩家老牧家史料



当世具足の名所 (鈴木敬三編『有職故実大辞典』)

軍配団扇

江戸時代

軍配団扇は、本来、矢や玉を防ぐためのもので、鍛えた薄い鉄で作られたが、のち軍の進退を指
図するときに用いた。列品は、全体を黒漆塗にし、金漆で梵字と方位図を書く。表中央にあるのは「ボロンの種子」。「ボロン」は「十三仏（一切結合）」をあらわす梵字の読み、「種子」は一字で仏をあらわす梵字のこと。また裏に月の運行図と梵字「マン」が書かれる。「マン」は「文殊菩薩」をあらわす梵字の読み。

常陸国下館藩家老牧家史料

村の世界

江戸時代になると、領主支配の末端としての村が各地に設定され、触れの伝達や年貢の取り立て、訴えや届け出など、領主とのやりとりは、主に文書（公的な文書）によって行われるようになりました。

同時に村は、生活・生産の場でもあり、読み書きのできる村人の増加により、生業や暮らしに関わる記録、手紙、領収書、日記など、私的な文書も多数書き残されるようになりました。

このように江戸時代の村では、たくさんの文書が作成されるようになり、現在までに膨大な量が伝存しています。

上名栗村と町田家

武藏国秩父郡上名栗村(現埼玉県入間郡名栗村大字上名栗、幕府領、石高約648石)は、飯能と秩父のほぼ中間に位置し、村の中央を流れる名栗川の川沿いに広がる山村である。名栗川は入間川、荒川と名前を変え、江戸に注ぎ、その川を通じて、上名栗村は、人工造林による杉・檜の良材を、江戸に供給した西川林業地帯の代表村として知られている。また、同村は、慶応2(1866)年に起きた武州世直し一揆の発生村としても有名である。

ここで陳列しているのは、同村の名主を代々つとめ、炭・材木商売をはじめとする諸商売を営んだ、山村豪農町田家が残した5万点を超す文書の一部である。

町田家の多彩な文化活動 —蔵書から見る—

江戸時代、農業技術の発達や生産力の向上、商品貨幣経済の進展などによって、村の生活は飛躍的に豊かになった。生活にゆとりが出ると、村に暮らす人々の間でも、学問や教養に触れたいという知的欲求が高まり、俳諧、浄瑠璃、書道、茶道、華道など、さまざまな文化活動が盛んに行われるようになった。

こうした村人の文化活動の一端を知ることができる史料の一つに書物がある。村の名主をしていたような大きな家では、大規模な蔵書群が形成されている。その蔵書の内容をみると、実用的なものから、娯楽性の強いものまで、実にさまざまなジャンルのものに関心が広がっていたことがわかる。

ここでは、町田家に伝來した蔵書を中心に、その多彩な文化活動を紹介する。

世話千字文<臨池老師墨蹟>

宝暦6(1756)年、補刻文化11(1814)年
大坂北久太郎町心齋橋通河内屋喜兵衛板

『千字文』は、元来中国南朝梁代(6世紀前半ころ)周興嗣によって編まれた四字一句の250句千字からなる初学者のための漢字学習のテキストである。中国で流行し、その後日本にも広まった。その日本版のようなものが『世話千字文』で、手習いのテキストとして広く用いられた。

町田家史料 No.5127

手習清書

嘉永3(1850)年

10代目当主町田瀧之助(1834~86)が、17歳の時に書いたもの。展示部分は、書式にのっとって借金証文を書いたところ。

町田家史料 No.5154

浮世道中膝栗毛初篇

享和2(1806)年刊

『東海道中膝栗毛』は、十返舎一九作の滑稽本。弥次郎兵衛と喜多八が、江戸を出發し、伊勢に参宮するまで、東海道を旅する間にさまざまな失敗や滑稽を演じる。本書は、一大ベストセラーとして、21年間にわたり続編が出された。

展示部分は、小田原の宿屋で、喜多八が入ったことのない五右衛門風呂の底を踏み抜く場面。

町田家史料 No.3194



道中膝栗毛続編

通油町村田屋治郎兵衛板

『東海道中膝栗毛』の続編。大井川(現静岡県)の川留より大津(現滋賀県)までの話を収録。

町田家史料 No.3197

げんじものがたりえづくしたいいしょう
源氏物語絵尽大意抄

元板文化9(1812)年、再板天保8(1837)年

渓斎英泉画/江戸芝神明町和泉屋市兵衛板

『源氏物語』五十四帖から各一首を選び、絵と頭注などを加えたもので、女性の教育用に作られ

た。渓斎英泉は江戸時代後期の浮世絵師で、美人風俗画を得意とした。

展示部分は、紫式部が石山寺(現滋賀県)に参籠中に源氏物語の構想を練ったという伝承から描かれた近江八景石山の秋月の場面である。



町田家史料 No.3198

かなでほんちゅうしんぐら
仮名手本忠臣蔵六段目一与市兵衛内勘平腹切の場一

江戸横山町2丁目伊勢屋喜助板

仮名手本忠臣蔵は、元禄15(1702)年の赤穂浪士の仇討ちを脚色した淨瑠璃で、全十一段。竹田出雲、三好松洛、並木千柳の合作。寛延1(1748)年、大坂の人形淨瑠璃芝居の竹本座で初演、すぐに歌舞伎化され、人気を博し、現在に至るまで繰り返し上演されている。

町田家史料 No.3220

じょうるりほん
淨瑠璃本とは?
淨瑠璃とは、三味線の節にのせて物語を語る邦楽の一種。淨瑠璃本は、その詞章を記した本で、譜面としてだけでなく、読み物としても享受された。

ようじょうくん
養生訓卷第一へ八

弘化再刻

浪花岩井寿楽板

正徳3(1713)年刊行、福岡藩の学者貝原益軒83歳の時の著作。健康・長寿を保つための心身の養生法がわかりやすく説かれる。江戸時代のロングセラーブックの一つ。

町田家史料 No.3116~3139

覚(書物代金領収書)

酉年2月24日

江戸日本橋南1丁目の本屋須原屋茂兵衛の町田家宛領収書。列品から、町田家は、『増補歲時記』5冊・『字林玉篇』1冊・『嵐雪句集』2冊を銀31匁5分で購入していることがわかる。

町田家史料 No.16806

つえのさきがけ
津恵能魁

戊辰年 春秋庵弘湖編

春秋庵は、安永9(1780)年に蕉風俳諧の祖といわれる加倉白雄によって設立され、関東・中部地方に門人3000人を数え、隆盛を誇った。飯能地方の俳諧は、その春秋庵の強い影響下にあつたといわれる。弘湖は春秋庵10世、列品はその句集。

町田家史料 No.3210

和歌短冊

町田瀧之助書

たなはたの あまつひれふる 秋の世に
八十のふな津を 見に出らむ

町田家史料 No.15349

俳諧短冊

町田瀧之助書

いろいろと染らす京の願かな

町田家史料 No.15356

明治の世

末は博士か大臣か一明治時代になると、四民平等の原則から職業の選択が自由になり、努力と運次第で富裕や榮達への道が開かれました。国家もアメリカやヨーロッパの帝国主義列強に肩を並べようと、文明開化と富国強兵に突き進みます。

明治とは、おとなもこどもも、そして国家も、立身出世を目指した時代といえましょう。

これは当時の遊びにも色濃く映っています。正月の代表的な遊戯だった双六には、立身出世を題材としたものが多くあります。また日本の帝国主義化が、人びとの眼を世界へ向けさせ、外国漫遊や冒険旅行が、双六のテーマに加わるようになりました。

双六（絵双六）とは、一枚の紙に描かれたマスのうえを、賽で振りだした目の数にしたがってコマを進めていく遊びである。コマを進める方法の違いより、廻双六と飛双六に類別される。廻双六は、出た目の数だけ順にコマを進めていく。飛双六は、指示された賽の目数と行き先にしたがって、マスを飛び移っていくものである。いずれもふりだしから出発して、上りに早く到達した者が勝ちとなる。なお双六にはもう一種、盤上のコマを動かす盤双六があるが、以後、単に双六という場合は、絵双六を指す。

滑稽内地雜居 魁寿語六

兀頂老人放斎／画

明治32(1899)年10月27日、金寿堂発行

明治32年7月、外国人が特定の居留地以外に居住することが認められたことを受けて発行された廻双六。来日した外国人が、さまざまな職業に就き、風俗をも受容して、日本人とともに暮らす姿を想像して、滑稽に描いている。

小西四郎史料<双六>

教育の名譽

小林清親・井上安治・武田広親／画

東京教育社『貴女之友』10号付録、明治21(1888)年1月5日発行

小学校→中学校→高等学校→帝国大学というエリート養成の学校システム創設のころに発行された飛双六。「上り」には公使・銀行・大臣・大将のいずれか、つまり外交・経済・政治・軍事の最高位に達したもののみ、進むことができる。

小西四郎史料<双六>

明治少年双六

武内桂舟／画 巖谷小波／考案

博文館『少年文集』4巻1号付録、明治31(1898)年1月1日発行

入学を振り出しに、さまざまな教科目を経て、試験に及第して「上り」となる廻双六。明治30年代ころまで、小学校でも、進級や卒業のための試験が行われていた。

小西四郎史料<双六>

かいこくごじゅうねんすうろく 開国五十年双六

竹坡国觀／画 巖谷小波／考案

博文館『少年世界』14卷1号付録、明治41(1908)年1月1日発行

幕末のペリー来航から、日露戦争論功行賞までの日本の歴史を題材とした廻双六。出版の50

年前、安政5(1858)年は、日米修好通商条約締結の年にあたる。「昭代」とはよく治まった世のこと。

小西四郎史料<双六>

りードル英語双六

児玉又七／画

明治20(1887)年発行

各マスに同じ頭文字の英単語を二語ずつ割り振り、ブロック体と筆記体の綴り方、発音と和訳、

ちなんだ絵を書き入れた廻双六。綴りや意味の誤り、単語の重複がいくつかみられる。「リードル」とはリーダー、つまり英語の教科書のこと。

常陸国下館藩家老牧家史料

日本周遊双六

水野年方／画

明治29(1896)年12月13日、博文館発行

名所・旧跡を周遊する趣向の廻双六。この双六発行の前年、明治28年に締結された下関条約

により、清国から日本に譲渡された台湾が振り出しとされる。作画は美人画で高名な水野年方。

小西四郎史料<双六>

文明遊名譽双六

岩下方直／考案 鏡堂翠湖／校閲

明治25(1892)年11月再版

小学校を振り出しに、イギリス留学と諸国歴遊を経て、帝国大学(現在の東京大学)大学院での

学位取得を「上り」とする飛双六。往路は茶色、復路は赤色の線をたどる。遊びながら世界の形勢や国旗、港などが学習できるよう工夫されている。

常陸国下館藩家老牧家史料

れいそう 宮中の礼装

平安時代からの有職故実にのつとり、宮内儀礼の際の服装には細かな決まりごとがありました。服装をみれば、その人の官位、役職などがひとめでわかる仕組みとなっていました。

明治期に至り、礼装は、伝統的な装束とあらたに導入された洋装との、二つの系統をもつ、日本独特のものができあがりました。

伝統的な装束は、十二单や束帯などのみやびやかなもの、一方洋装は、女子のローブ・モンタントや金モールで華やかに刺繍された男子の大礼服など、ヨーロッパの宫廷服に範を得たものです。

文官大礼服（勅任官）

大正～昭和初期

明治 19（1886）年制定の勅任（二等以上の高等官）文官大礼服。

西洋の宮廷服を模し、燕尾服形の上衣にズボン、チョッキ、駄鳥の羽飾りのついた帽子、剣で構成される。

官職や身分を表す「飾章」とよばれる文様を金モールで刺繡するのが特徴である。

常陸国下館藩家老牧家史料

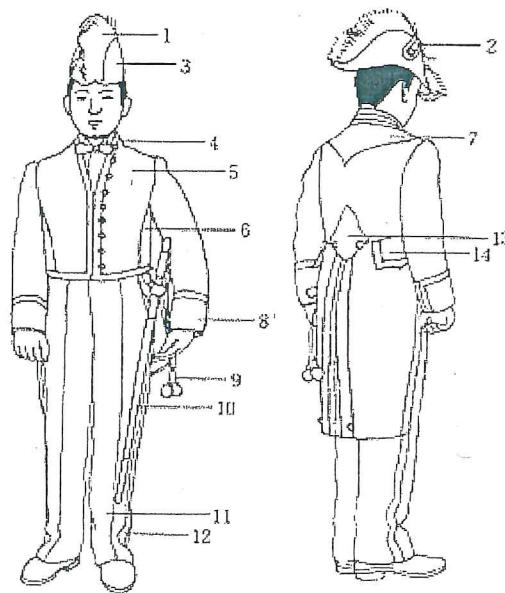
大礼服 付属品

トランク、帽子入れ、剣。

常陸国下館藩家老牧家史料



勅任文官大礼服



（風俗博物館ホームページより）

昭和天皇 東宮御学問所時代制服

大正 3（1914）年頃

皇太子裕仁親王（のちの昭和天皇）は大正 3（1914）年に学習院初等科を卒業された後、学習院中等科には進まず、13歳から 19歳までの 7年間、高輪の東宮御所内に設けられた「東宮御学問所」において、5人の御学友とともに学ばれた。その際に着用された制服である。

学習院中等科の制服とほぼ同じで、徽章のみ「桜花」ではなく、「桐花及桐葉」となっている。

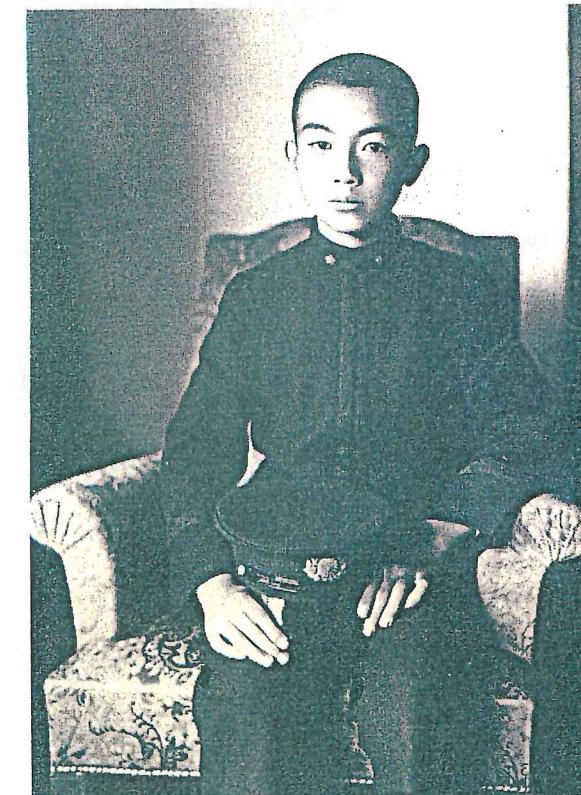
奈良武康氏寄贈

* 寄贈者の奈良武康氏の父は東宮武官長の奈良武次

東宮御学問所時代の昭和天皇

大正 3（1914）年頃

陳列の制服を着用された皇太子裕仁親王（のちの昭和天皇）。



大竹秀一『天皇の学校』より

* 大正 3（1914）年 5月 5 日付 朝日新聞

「東宮殿下は学習院御同様の制服に只従来の半洋袴を普通の洋袴に換へさせられ浜尾大夫、入江侍従長以下東宮侍従を隨へ御式場に台臨あり一同最敬礼の裡に正面設けの御座に御着席あらせらる、此時總裁東郷元帥は恭しく御前に進み出て謹厳なる態度を以て『平八郎謹んで申上げ奉ります、本日より当御学問所に於て愈御修業の御事となられましたに就きましては殿下には益々尊体を御健康に御学業を御励み遊ばされむことを偏に 希 ひとへ こいねがひ 奉ります』との式辞を言上すれば殿下には直立不動の御威儀正しく御受あり御首肯を以て御答意を示させられ御機嫌殊の外麗しく御退場遊ばされたりと承はる。」

つじ くにお
辻 邦生 (1925—1999)

学習院ゆかりの人びと

学習院は、明治10(1877)年、華族会館が経営する私立学校として、神田錦町に創立されました。その前身は弘化4(1847)年開講の京都学問所にさかのぼります。

明治17年、官内省所轄の官立学校となり、同41年には、現在の目白校地に移転しました。

第二次世界大戦後の昭和22(1947)年、私立学校として、新しい歴史を歩みはじめ、現在に至っています。

学習院の100年を超える歴史と伝統は、多くの人びとの関わりによって築かれてきたものといえましょう。

作家・フランス文学者である辻邦生は、学習院高等科・大学文学部の非常勤講師を経て、昭和50(1975)年から平成3(1991)年まで文学部教授(フランス文学科)を勤めた。主な作品には、『背教者ユリアヌス』、『安土往還記』、『西行花伝』などがある。

高等学校国語科教科書『現代文』

1999年3月15日文部省検定済、東京書籍

23ページにわたり、「西行花伝」が掲載されている。

辻邦生史料

『西行花伝』

1995年4月30日、新潮社

貴族政治から武家支配へと時代が大きく変わる平安末期に活躍した、歌人西行の生涯を綴った歴史小説。谷崎潤一郎賞受賞。

辻邦生史料

「西行花伝」自筆原稿

十一の帖原稿。「西行花伝」は雑誌『新潮』の1991年1月号から1993年6月号まで連載された。

辻邦生史料

『学習院大学入学案内』

1983年度

個人蔵

学習院大学教務関係行事予定表

昭和37(1962)年9月～12月

授業に関するメモとともに、執筆予定も書き加えられている。9月15日の欄外にある「宗吉」

とは北杜夫(斎藤宗吉のこと)。

辻邦生史料

フランス文学科教員のスケッチ

『草の花』『愛の試み』で知られる作家福永武彦の似顔絵が描かれていることから、辻と福永と共に学習院大学で教鞭をとっていた1970年代後半のものと思われる。辻はしばしば創作ノートやメモ類の余白に、こうしたイラストを描いている。

辻邦生史料

『辻邦生が見た20世紀』

2000年7月29日、信濃毎日新聞社

学習院大学のフランス文学科に関する記載が見られる。

代表作である『西行花伝』『背教者ユリアヌス』『雲の宴』等の作風から、辻邦生に対して固いイメージを持たれがちであるが、北杜夫と親友であったことからもわかるように、実は大変ユーモラスな面を持っていた。今回展示しているのは、学習院大学フランス文学科で同僚だった福永武彦らの似顔絵であるが、このようなイラストを執筆メモや家族との連絡書きの余白によく描いており、時には締め切りに追われて編集者に叱られている自分の姿を遊び心たっぷりに描いている。

【列品一覧】2004年度 学習院大史料館 収蔵史料展－歴史と伝統に出会えるところ－

◎写真・文献図書・コピーを除く

史料名	成立	史料群名	目録での史料請求番号	展示期間に関する情報
百鬼夜行絵巻全1巻	江戸時代写	常陸国下館藩家老牧家史料		2週間に1度展示箇所を変えます
徳川家綱発給 領知判物	寛文4(1664)年4月5日	陸奥国棚倉藩主・華族阿部家史料	No.1-1<レプリカ>	
領知判物入箱	江戸時代後期	陸奥国棚倉藩主・華族阿部家史料	No.1824・1825	
武家諸法度	嘉永7(1854)年9月25日	陸奥国棚倉藩主・華族阿部家史料	No.894	
公餘附録	明治初期	陸奥国棚倉藩主・華族阿部家史料	No.904	2週間に1度展示箇所を変えます
薄紫糸威二枚胴具足	江戸時代	常陸国下館藩家老牧家史料		
軍配団扇	江戸時代	常陸国下館藩家老牧家史料		
世話千字文	文化11(1814)年	町田家史料	No.5127	
手習清書	嘉永3(1850)年	町田家史料	No.5154	
浮世道中膝栗毛 道中膝栗毛続篇	享和2(1806)年刊	町田家史料	No.3194	
源氏物語絵尽大意抄	天保8(1837)年再版	町田家史料	No.3198	
養生訓一～八	弘化再刻	町田家史料	No.3116～3139	
仮名手本忠臣蔵六段目		町田家史料	No.3220	
寛(書物代金領収書)	酉年2月24日	町田家史料	No.16806	
徒恵能體	戊辰年	町田家史料	No.3210	
和歌短冊		町田家史料	No.15349	
俳諧短冊		町田家史料	No.15356	
滑稽内地雜居魁寿語六	明治32(1899)年10月27日	小西四郎史料<双六>		4/26～5/25
教育の名謡	明治21(1888)年1月5日	小西四郎史料<双六>		
リードル英語双六	明治20(1887)年	常陸国下館藩家老牧家史料		5/26～6/22
日本周遊双六	明治29(1896)年12月13日	小西四郎史料<双六>		
文明遊名謡双六	明治25(1892)年11月	常陸国下館藩家老牧家史料		6/23～7/20
開國五十年双六	明治41(1908)年1月1日	小西四郎史料<双六>		
明治少年双六	明治31(1898)年1月1日	小西四郎史料<双六>		
文官大礼服(勅任官)	大正～昭和期	常陸国下館藩家老牧家史料		
大礼服 付属品	大正～昭和期	常陸国下館藩家老牧家史料		
昭和天皇東宮御学問所時代制服	大正3(1914)年頃	奈良武康氏寄贈		
高等学校国語科教科書	1999年3月15日	辻邦生史料		
『西行花伝』新潮社	1995年4月30日	辻邦生史料		
「西行花伝」自筆原稿		辻邦生史料		
『学習院大学入学案内』	1983年度	個人蔵		
学習院大学教務関係行事予定表	昭和37(1962)年9月～12月	辻邦生史料		
フランス文学科教員のスケッチ	1970年代後半か	辻邦生史料		
『辻邦生が見た20世紀』	2000年7月29日	辻邦生史料		

作成:2004年4月 学習院大学史料館